和讃の成立年代

多屋頼俊

和讃の最古のものとして、百石讃嘆、法華讃嘆、舎利讃嘆等が擧げられて居る事がある。

讃嘆はその用途に於いて、内容に於いて、和讃と極めて親しい關係にあるものではあるけれども、然し兩者は區別すべきものであると思ふ。抑「和讃」と云ふ語を解して、和語讃嘆とするのは通說である。和讃が和語讃嘆の意である事は勿論であるが、和語讃嘆の凡てが和讃でない事も亦勿論である。思ふに「和讃」とは、佛前で諷誦する事を目的として作られた國語七五調の佛教讃歌の謂である。讃嘆は七五調ではなく、散文風の所もあつて、その形式和讃とは同じからざるものである。「讃嘆」は和讃よりも早く成立して居ると考へられるが、和讃の成立後は殆んど製作せられて居ない樣である。が「讃嘆」の直接系統を繼いだのは、和讃ではなく、「敎化」であると思ふ。卽ち「和讃」は「讃嘆」及び「敎化」に對して並行的地位にあるものと思ふ。

さて又和讃の最古のものとして、行基の和讃、伊呂波歌等が擧げられてゐる事がある。所謂**行基の和讃**は、沙石集卷五下、「行基菩薩之歌事」の條に

行基菩薩ハ。和泉ノ國ニ降誕シ。藥師ト云下女ノ腹ニ宿リ給ヘリ。心ブトノ樣ニテ生レタリケレバ。アヤシミテ鉢ニ入テ。門ノ榎ノマタニサシアゲテ置ク（中略）彼ノ御誕生ノ所ニ昔ヨリ講行（長亨の寫本には講經とあり）ナンド行テ。和讃ヲ作リ誦シ侍ケル。

藥師御前御誕生　心太キニソ似タリケル

スリコ鉢ニサシ入テ　榎ノ本ニソ置テケル

ト侍ル（下略）（貞享三年版による）（長亨本には、和讃の第二句「心太ニゾ」とあつて、「キ」字が無い。無い方が正しい）

とあるのである。然し沙石集には、此和讃を行基の作とも、行基の在世時代の作とも、行基示寂の直後の作とも記して居らない。唯「昔ヨリ」と云つて居るのみである。而して其「昔」とは勿論無住が沙石集を書いた時代（沙石集の奥書に、弘安二年に起筆し、弘安六年に脱稿したと記してあるが、著者が徳治三年に詠んだ歌も入つてゐるから、弘安六年後にも筆を加へて居た事が知られる。）から云ふのであるから、弘安から五十年か七十年程前の事であるかも知れない。（弘安六年は頼朝が幕府を開いてから九十一年後。）兎もあれ、行基は奈良朝の人であると云ふ迄で、この和讃を奈良朝の作と推測せしめる如き語は、沙石集には全く無いのである。加之、著者自ら「事ハ誠ニ奇特不思議ナレドモ。和讃ノ詞ハイトヨロシカラズ。信心モサムル心セリ。靈佛ノミメワロキニ、戸帳ヲカクルゴトク。此和讃モ箱ノ中ニ收ムベキヲヤ」と記してゐる。實に痛切な批評である。此の如き鄙俗な和讃が、如何して奈良朝や平安

朝の初期中期等に出來得やうか。尤もこれは和泉國の行基の生誕地（大鳥であらう）で行はれたと云ふから、其附近の文才の乏しい人の手に成つたのかと考へられるが、其にしても俚謠とは全然性質を異にする和讃が、中央にすらもない時代に、忽然として邊鄙の地に發生したとは考へ難い。恐らくこれは和讃が相當流布した平安朝の末期か鎌倉の初期に出來たものであらう。次に

伊呂波歌 について一言しよう。伴信友が「假字本末」に伊呂波歌を和讃の濫觴と斷じて以來、其に從ふ學者も少くない。が信友の說の主要な根據は、伊呂波歌の形式が「僧家に和讃とて唱ふ歌と、句調風躰もはら同じ」であつて、此形式に於いて伊呂波歌が最古であると云ふのである。伊呂波歌は七五四句（七音と五音と續けて十二音を一句と見る）から成るものであるが、七五調は伊呂波歌よりも遙に古くから存して居るのであつて、その點では伊呂波歌を最古とは云ひ得ない。第二に古來の和讃を概觀して見ると、三帖和讃の如く明かに四句一章のものも存するが、大部分は四句一章に成つて居ない。其故に形式に於いては伊呂波歌は和讃の濫觴とは云ひ得ないものであり、且つ後の和讃と直接重要な關係があるとも考へられない。（これらの事については拙稿「和讃の形式」の參照を乞ふ雜誌「國語と國文學」八卷二號に掲載せられる筈である）更に和讃は前記の如く、佛前で諷誦する事を目的として作られたものであるが、伊呂波歌は古來佛前では諷誦せられなかつた樣である。卽ち伊呂波歌が弘法大師の作であるとすれば、和讃の成立について注意すべきものではあるが、伊呂波歌を直ちに和讃として取扱ふべきでは無いと思ふ。猶此處に一言す可き事は、河海抄所

引の江談に「イロハニホヘトノ讃」と云ふ語がある事である。がこの「讃」字は、來迎和讃を來迎讃と云ふ場合の「讃」とは異り、畫讃論賛等の「讃」の意と解す可きであらう。

さて然らば、最古の和讃は、何れの和讃であらうか、自分は傳慈惠大師作「本覺讃」、傳千觀阿闍梨作「極樂國彌陀和讃」及び傳源信僧都作の「極樂六時讃」、「天台大師和讃」等であると思ふ。依つて以下此等の和讃について、所傳の作者が信ずるに足るか否かを檢しよう。先づ

本覺讃 について見る。和讃の本文は、天台霞標四編三卷及び天台小部集に收められてゐる。而して兩者少しく異つて居る。卽ち天台霞標所收のものは「註本覺讃」と題し、「歸命本覺心法身、常住妙法心蓮台、三身萬德備利丑、三十七尊住給不、云々」と七五、五十八句を運ね、終りに「若人欲了知、三世一切佛、應當如是觀、心造諸如來」と云ふ五言四句の華嚴經の文が添へられてゐる。而して天台小部集所載のものは初に「本覺讃」と題し、「歸命本覺心法身、常住妙法心蓮台、本來具足三身德、三十七尊住心城、普門塵數諸三昧、遠離因果法然具、無邊法德本圓滿、還我頂禮心諸佛」と七言八句の、妙法蓮華三昧秘密三摩耶經の自證偈を掲げ、次に「又註本覺讃」と標して、「歸命本覺心法身云々」と天台霞標所收のものと同樣のものが載せてある。三摩耶經の自證偈は、此和讃の典據であつて、和讃の本文としては、天台霞標所收の部分だけでいゝのである。

さて此和讃について高野辰之博士は、「慈本の天台霞標にこれ（慈惠大師作、註本覺讃）を掲げて居ないならば、もつと之を後世假記の作と推定したく、其の用語行文の上から見ては、後の法然前後に出たものとして最もよく頷き得るのである」（日本歌謠史）と記して居られる。處で日本歌謠史の刊行より三年前、大正十二年の夏、上杉文秀先生が講述せられた「觀心略要集講錄」の後篇に、源信僧都の「顯密一致の思想と其の師承に就いて」說かれた章の中に、此和讃について記して居られる。卽ち、

「本覺讃」は慈惠僧正の作なること「天台霞標」にも記する如く、此には古來疑ふものなきやうに思ひたりしが、近來はいかにも源信和尚の作の如く取扱はるゝやに見ゆ。是に於て何の間違よりかくの如き取扱方生じ來りたるかを思ふに、恐くは註本覺讃と本覺讃釋（源信和尚著）の混雜したるものならむか。是に於て予輩は故らに云はんとす。又註本覺讃の五字は後人の加ふる所にして慈惠僧正の自ら題せられしものにあらざるべしと。若し然らば僧正の本覺讃と八句の偈との關係如何といふに、僧正の意としては八句の偈が卽ち本覺讃にしてその意味を和譯し敷衍し讃詠したるが後の六十二句であるから、後輩よりいへば本覺讃なる新しき名は、實に僧正の作物に附するが至當たるを思はねばならぬ。猶此「本覺讃」が源信僧都の作にあらざることは、「釋」の初に採先哲之舊懷の語あるによりても知らる（中略）。されば吾人は古來の稱呼の如く、單に「本覺讃」といふて故らに註の字を附けざるを却て濫を避くる方なりと思ふ。そしてその作者は慈惠僧正といふことに疑なし』。

と斷ぜられ、次に和讃を科釋し、本和讃中に顯密一致の思想が明に顯はれて居る事を指摘して源信僧都の顯密一致の思想の師承を明にして居られる。源信僧都が慈惠大師から顯密の敎を傳へられた

事は、今昔物語卷十二、横川源信僧都語第卅二話にも出て居る。而して日本天台章疏目錄には源信僧都の著として本覺讃釋が出てゐるから、大體僧都に本覺讃釋の著があつた事は認めてもよからうと思ふ。若しこの考に誤がないならば、本覺讃が、源信僧都より以前の人の作である事は疑ない事と思ふ。而して上杉先生の說かれる如く、源信僧都の思想に大きな影響を與へてゐる事、天台霞標に慈惠大師の作と記して居る點等から見て、本覺讃は慈惠大師の作に認めて差支へあるまいと思ふ。

扨、本覺讃釋は、本覺讃の本文を擧げて理趣を說いたものであるが、和讃の本文は、

「歸命本覺心法身」、(中略)頌云「常住妙法心蓮台」(中略)、頌云「三身萬德備、三十七尊住給」、(中略)頌云「心法本自無形內外處所不在」、(中略)頌云「胸間方寸阿梨耶識名」(以下略)

と云ふ樣に一句も殘さず擧げて註釋してある。漢文である爲に、送り假名が、現存の和讃と完全に一致するか否か、若干明確さを缺くけれども、この注釋に依つて、本覺讃の本文が、七五六十二句、終りに五言四句の偈のあるものである事が明に證明せられる。

因に和讃の題名は、上杉先生が說かれた如く、又源信僧都の註釋が「註本覺讃釋」とはなく、「本覺讃釋」とある點から見て、註の字を附けずに、「本覺讃」と呼ぶべきであると思ふ。次に、傳千觀阿闍梨作

極樂國彌陀和讃について見よう。此和讃については、既に諸氏が指摘して居られる如く、日本往

生極樂記の千觀の條に、

(千觀) 兼學顯密、莫不博涉、除食時外、不去書案、作彌陀和讃廿餘行、都鄙老少、以爲口實、極樂結緣者、往々而多矣。

と見えてゐる。極樂記の著者慶滋保胤は、千觀より十三年後に歿した人であるから、略同時代の人であり、且つ千觀と同じく願生西方の人であり、同じく空也上人の弟子と傳へられる人であるから、その記述は頗る信用するに足るものである。然るに此處に問題となる事は、極樂記には「廿餘行」とあるのに、現存の和讃は六十八句あつて、一致し難い事である。此については、大矢透博士、志田義秀氏、高野辰之博士等が其々研究を發表して居られるが、三氏三樣で、末輩余の如きは、何れに從ふ可きかを迷はざるを得ない。加之三氏の說、余輩には何れも直ちには肯首し難い點が存する。依つて次に三氏の說を摘記し、後に卑見を記す事とする。

先づ大矢博士は、極樂記に二十餘行とあるから、

「其の和讃は二十餘行なりしが如し、仍て六十八句を四句づゝに分てば、十七にして二十行に近し。然らば一行とは七五四句をいへるものゝ如くなれば、嘗みに先づ初四句を讀むに、果して四句にて一章を爲し、其の一章は今樣と同式なり。然れども之を四句づゝに截りて見るに四句にて其の意の纒り難きもの少からず。乃ち其の意の纒るものゝみを全章と見て、然らざるものは句の脫したるものとして、之を敎へ見るに、恰も二十章となれり。是にて極樂記と和讃と略、一致せるより此和讃の眞に千觀のものなる事を證し得べし。」

と云はれ次の如く脱落あるものと見られた。

㈠ 娑婆界の西の方　十萬億の國すぎて
淨土はありつ極樂界　佛はゐます彌陀尊

㈡ 七重行樹かけ清く　八功德水池すみて
苦空無我の波唱へ　○○○○○○○

㈢ 常樂我淨の風吹きて　天の音樂雲にうつ
○○○○○○○○　○○○○○○○

㈣ 金(こがね)の沙地(いさご)にしきて　晝夜六時に迎へつゝ
寶の蓮雨ふりて　○○○○○○○○（以下略）

かくて極樂國彌陀和讃は全體に十二句の脱落があつて、もとは八十句二十章から成るものと說かれた。（音圖及手習詞歌考）

これに對して志田義秀氏は、

今傳へる極樂國彌陀和讃が、往生極樂記に「彌陀和讃二十餘行」と云つて居る其のものであるかは頗る疑問で、大矢透氏はこれを脱句と認めて居られるけれども、脱句として行を分つても、丁度二十行にしかならない上に、意味の接續の上に無理な所が生じて來るので、斯く脱句二十行と見ることは、却つて原作の形式ではないのではないかと思はれる。されば これを千觀の眞作と認める爲には、極樂記の文の「廿餘行」の廿を十の誤字と認めた

一三五

一三六

方が穩當であるかと思ふのであるが、何れにしても千觀の眞作と云ふ確證は更に無いのである。（下略）（增訂「梁塵祕抄」附錄梁塵祕抄の本文に就いて）

と。而して、高野博士は、

今傳つてゐるものが其全文かどうか不明であるが、今樣歌の例に隨つて、七五二句を一行として數へれば、六十八句は三十四行となつて、往生極樂記の二十餘行はまさに三十餘行の誤であらうと思ふ（日本歌謠史）

と。此の如くである。思ふに大矢博士の脫句說は志田氏の云はれる如く、意味の接續上無理があつて從ひ兼ねるものである。さればと云つて極樂記の「廿餘行」は「十餘行」の誤りかと推測せられる志田氏の說にも從ひ難い。何となれば、四句一章で十七章のものと見ようとすると、既に大矢氏が指摘せられた如く、四句づゝでは意味の纏り難いものが少くないからである。かくて兩氏の說は共に若干の無理がある樣に思はれるが、其無理は何に起因するのであらうか。思ふに兩氏共、和讃は七五四句で一章をなすものと定めて問題を解かうとして居られるが、その前提が疑ふ可きものであるのである。和讃の中には三帖和讃の如く明かに首尾一貫した四句一章のものも存するが四句一章ならざるものも決して少くないのである。（前記拙稿「和讃の形式」の參照を乞ふ）從つて「廿餘行」の「行」字を「章」「首」等の意に解せられる事には無理があらうと思ふ。高野博士は「行」は普通に云ふ「一行」「二行」の「行」「くだり」の意にして居られる。其點自分は高野博士の說に從ふものである。然し「廿餘行」

を「卅餘行」の誤りとは考へ度くないのである。何となれば今様は一行に二句づゝ書くとは決して定まつて居らないからである。例せば金剛寺所藏の嘉應二年の今様歌、鎌倉初期の筆と云はれる大報恩寺佛體所現の法文歌の如き、又書寫の時代は下るが、梁塵祕抄、唯心房集等は何れも一行に二句づゝ記して居ない。從つて高野博士の說も前提が決定的でない爲に、廿餘行は卅餘行の誤であらうといふ結論も、直ちに信用する事は出來ない樣に思ふ。

扨、此處に注意す可き事は、「廿餘行」といふ事が極樂記にだけ記されてゐるのならば、現存の和讃と一致せしめる爲に、「廿」は「十」又は「卅」の誤とする說も立ち得るであらうが、「廿餘行」は既に伴信友が指摘してゐる如く、「今昔物語卷十五」、「比叡山千觀內供往生語、第十六」にも記されてゐる。卽ち

（上略）比叡ノ山ニ登テ出家シテ名ヲ千觀ト云フ其ノ後□ト云フ人ヲ師トシテ顯密ノ法文ヲ兼學ブニ心深ク智リ廣クシテ二道ニ於テ悟リ不得ズト云フ事無シ食物ノ時大小便利ノ時ヲ除テハ一生ノ間法文ニ不向ザル時ハ無シ亦阿彌陀ノ和讃ヲ造ル事廿餘行也京田舍ノ老少貴賤ノ僧コノ讃ヲ見テ興ジ翫テ常ニ誦スル間ニ皆極樂淨土ノ結緣ト成ヌ（下略）

と。今昔物語も亦千觀の時代に近き書であるからその記述は信用す可きである。かくて「極樂記」「今昔」兩書とも「廿餘行」と記して居るのであるから、餘程有力な反證の出でざる限り、千觀の和讃

一三七

は廿餘行であつたと解す可きである。然らば廿餘行と六十八句を如何に關係づける可きであらうか、微力、遺憾ながら論斷を下し得ないのであるが、試に一案を記すなら、一行に約三句づゝを書いたと見る事は許されないであらうか、三句づゝと云へば、漢字を交へても三十字餘となり、一行としては字數が稍多きに過ぎる樣ではあるが、短歌を一行にも書く事から推せば必ずしも在り得ない事でもあるまいと思ふのである。而して若し三句程づゝ書いたとすれば、六十八句は二十三行弱となり、「廿餘行」に合致するのである。勿論これは憶測であつて、これを主張しようとするのでは決してない。唯自分としては、有力な證據の出でざる限り、其和讚の「廿餘行」と云ふ事、並に現存和讚の六十八句を增減す可きではあるまいと思ふのである。

扨和讚の冒頭の四句は、菩提心讚の上卷に、「和讚とて日本詞を本として作れるもあり、其讚に云」として擧げてある。但し四句の中後の二句に次の如く少異がある。

現存の和讚	菩提心讚引用文
淨土はありつ極樂界	淨土はあるなり極樂界
佛はゐます彌陀尊	佛在ます阿彌陀尊

菩提心讚には誰の作とも何和讚とも記して居らないが、其は、「京田舍の老少貴賤」が常に誦して居たから、特に其名を記す必要がなかつたからではあるまいか。菩提心讚の成つた大治三年戊申は、

一三八

千観の示寂後百四十四年で、時代が稍隔り過ぎるかの感もあるが、鎌倉期に出來た「古今著聞集」にも、千観が「阿彌陀和讃をつくりて、自他をして唱へしめ」たと記してゐるから、上記の推定は許される事と思ふ。（猶、高野博士は此の和讃が、長西錄に「極樂讃一卷千觀」と記されてゐると云つて居られる。蓋し「極樂國彌陀和讃」とこの「極樂讃」とは博士の云はれる如く同一物であらうと思ふ。）

菩提心讃の引用文と、現存の和讃とは、僅か四句の中に四五字の相違がある。（老少貴賤が誦して居る中に、少しづつ訛つたものであらうと思ふが）、何れが原作に近いかは容易に斷定し難い。從つて現存の和讃の一字一句悉く原作のまゝとは勿論考へ得ない事であるが、以上記した處に依つて、大體千観の作として取扱つて差支へあるまいと思ふのである。

次に源信僧都の作と傳へられる和讃に就いては、本誌九卷の二號及四號に「源信僧都の作と傳へられる和讃の眞僞」と題して私見を發表し、「極樂六時讃」及び「天台大師和讃」の二篇が、大體僧都の作と見て差支あるまいと云ふ事を記した。

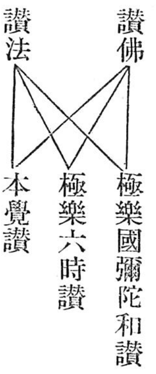
以上を要約すれば、「本覺讃」、「極樂國彌陀和讃」、「極樂六時讃」及び「天臺大師和讃」が大體傳へられる如き作者の手に成つたと考へられ、而して此等が和讃の最古のものと認められると思ふ。製作の年月は固より明ではないが、三人の略年譜を示せば次の如くである。

天皇	皇紀	年月	慈恵	千観	源信
村上	一六二二	應和二年四月	（五十一歳）	法華三昧宗相對抄を作る	（二十一歳）

一三九

同	一六二六	康保三年八月	天台座主に補せらる(五十五歳)		(二十五歳)
圓融	一六四四	永觀二年	(七十三歳)	示寂(年未詳)(異説あり)	往生要集起草(四十三歳)
花山	一六四五	永觀三年正月	示寂(七十四歳)	(寂後一年)	(四十四歳)
後一條	一六七七	寛仁元年六月	(寂後三十二年)	(寂後三十三年)	示寂(七十六歳)(異説あり)

四篇の和讃の中、何れが最も古いかは分らないけれども、慈惠千觀の生存年代から見て、和讃は村上、冷泉、圓融の朝に成立したものと見る事が出來る。但しこれは作者が大體推定し得るものについて云つたので、和讃中には作者不明のものが少くなく、その中には或は上記のものより古いものがあるかも知れない。さて、和讃は佛教讃歌である以上、その內容は佛法僧の讃嘆の外に出づるものではない。上記四篇の和讃を佛法僧に當てると、大體左の如くである。



讃僧――――天台大師和讃

卽ちこれらの和讃に依つて和讃が有つべき內容は原則的に具備せられたと云ふ事が出來ると思ふ。

猶右の外に空也上人に空也和讃の作があつたと傳へられるけれども、これは既に諸氏が云つて居られる如く、上人の作と推定すべき資料が甚だ不十分であるから、今は觸れないでおく。